

乙女ゲームの悪役騎士  
に転生したカントが攻  
略対象の王子に「お前  
を処刑する前に一つだ  
け確かめたいことがあ  
る」と牢の中で運命を  
変えられる話

石壁を伝い落ちる水滴の音が、鼓膜を叩く。

鎖がじゃらりと鳴った。手首を繋ぐ鉄の枷が、動くたびに皮膚を抉る。

「……っ」

牢の隅に蹲ったセレンの膝が、かすかに震えていた。

明日の朝、首を刎ねられる。乙女ゲーム『翠玉の王冠』の悪役騎士セレン・ヴォルフハイトとして——五年間足搔いて、結局ここに来た。

(結局、シナリオは変えられなかった)

ぽた。ぽた。処刑までの残り時間を刻むように正確な間隔で、水滴が落ちる。

その規則的な音に混じって——廊下の奥から、別の足音が近づいてきた。

硬質な革靴が石畳を踏む。衛兵の巡回じゃない。もっと重い。もっと迷いのない一歩。

足音が格子の前で止まる。

松明の逆光に長身の影が浮かんた。墨色の長髪。金の瞳。

「——」

セレンの喉がひゅっと鳴った。

第一王子アルシェス・ラディウム・クラウゼン。処刑を宣告した張本人が、そこに立っている。

(こんなイベント、ゲームには——)

アルシエスは衛兵を下がらせ、鍵を回し、鉄格子の扉を開けて中に入った。自分の背で扉を閉め、鍵を外から掛けさせる。

逃げ場が消えた。牢の中に、二人きり。

「お前を処刑する前に、一つだけ確かめたいことがある」

低い声が石壁に反響する。抑揚のない、裁定者の声。

だが金の瞳の奥で何かがちらついている。松明の残り火を映しているだけとは思えない、別種の熱。

セレンは背を壁に押しつけて退がろうとした。鎖が張り、それ以上は下がれない。

アルシエスが二歩で距離を詰め、片膝をつく。松明のわずかな灯りで、互いの息がかかる距離。

大きな手がセレンの囚人服の襟を掴んだ。

「やめ——」

——ぴりっ。

一息に引き裂かれた。乾いた布の裂ける音が牢に響き、胸元から腹部まで麻布が割れる。肋骨の浮く白い腹、薄い胸、華奢な鎖骨が月光に曝された。

「っ、な……」

腕で胸を庇おうとするが、鎖の長さが足りず肘までしか上がらない。

アルシエスの手がセレンの腹を滑り降りた。下腹部。腰骨の内側。麻のズボンの紐に指をかけ、一気に引き下ろす。

「やめろっ……！」

股間を偽装していた晒布をあっさり剥ぎ取られた。冷たい空気が肌を撫で、月光の一筋が——白い太腿の間に走る薄い縦筋を、容赦なく照らし出す。

「……やはりか」

アルシエスの声に驚きはない。最初から答えを知っていた者の声色。

「お前がカントボーイだという噂は、本当だったようだな」

「っ……」

全身の血が引いた。五年間。買収した軍医、避け続けた共同浴場、鎧の下に巻いた晒布。その全部が、たった一言で崩れ落ちる。

（なんで王子が——ゲームのセレンにこんな設定はなかったはずだ。ボツになった裏パラメータの、なのに——）

ぽた。ぽた。ぽた。

水滴の音と心臓の鼓動が、重なった。

「……殺すなら、さっさとやれ」

声が震えた。もう隠せるものは何もない。裸同然で膝を抱え、牢の壁に背中を押しつけて、処刑を待つしかない。  
——と。

アルシェスが自分の外套を外し、セレンの肩に掛けた。

引き裂いた張本人が隠すように布をかける。その矛盾に、セレンの思考が止まる。

「騎士団で五年、隠し通してきたのだろう。……大した胆力だ」

冷酷な王子の口から出たとは思えない声だった。

「処刑は取り消す」

「——は？」

「条件がある。俺直属の護衛騎士として、俺個人に仕えろ。表向きは恩赦だ。お前の剣の腕を惜しむ、という体裁を取る。秘密は俺が管理する」

殺されると思った。嘲笑われると思った。なのに——処刑の取り消し。秘密の保護。

「……なぜ、そこまでする」

「腕の立つ護衛が一人増える。悪い取引じゃないだろう」

合理的な説明。王子らしい計算。疑うべきだ——でも、他に選択肢がない。

「……分かった。仕える」

五年間張り詰めていた糸が、ほんの少しか緩んだ。

処刑が消えた。ゲームのシナリオが変わった瞬間。

アルシェスがセレンの傍に膝をつき、鎖の鍵を取り出す。

かちり。手枷が外れた。手首に鉄が食い込んだ赤黒い跡が残っている。

「見せろ」

言いながら、アルシエスがセレンの手首を取った。大きな手が傷跡を包むように触れ——そのまま、唇を押し当てる。

「なっ……何を」

「鉄錆が傷に入ると膿む。消毒だ」

嘘だ。舌が傷跡を這っている。消毒にしてはゆっくりすぎる。舌先が手首の内側をぞろりと舐め上げ、肘の窪みの薄い皮膚にちろりと触れた。

「ん……っ♡」

腕に烏肌が総立ちになる。

唇が肋骨に沿った鎖の痣に移った。舌が赤黒い痕をなぞり、腹を這い——下腹部の際で、止まる。

「っ……やめ……っ♡」

（何で——止まるなら最初から舐めるなよ……っ）

安堵しかけた瞬間、アルシエスの手がセレンの太腿に触れた。内側。柔らかな皮膚を、指がゆっくり上に辿る。

「ひ……っ♡」

指先がカントの縦筋に触れた。

外側を——輪郭だけを、なぞるように撫でる。

(だめだ……っ♡ 誰にも触られたことない……自分です  
ら……っ♡♡)

他人の指がそこにあるという事実だけで、頭の芯が痺れる。  
指が割れ目を割った。薄い肉の間に指先が沈む。

くちゅ。

牢の静寂の中で、その小さな音がやけに大きく響いた。

「っ……あ……♡♡」

セレンが咄嗟に自分の口を押さえる。声が——出そうになる。

「ん……っ♡♡ んっ……んん……っ♡♡」

アルシェスの指がクリトリスの突起を捉え、腹でゆっくり  
と撫でた。指先がくるくると円を描き、敏感な粒を弄ぶ。

「声を殺すな。ここは地下牢だ。衛兵は廊下の向こうに下が  
らせた」

「む、無理……っ♡ こんな声……男が出していいわけ——ん  
う……っ♡♡」

(男なのに……っ♡ こんなとこ触られて……声出してるなん  
て……っ♡♡)

自分の身体が裏切っている。嫌だ、おかしい、と頭は叫ん  
でいるのに、カントの奥からじわりと熱い液体が滲み出して  
くる。

触られたことのない場所が、初めての刺激に過敏に反応している。

くちゅ、くちゅ、くちゅ。

ぽた——ぽた——。

水滴の音と指の水音と、押し殺した吐息が、牢の中で三つ重なる。

「んっ……♡ あ……♡ や……もう……っ♡♡」

「もう？ まだ触り始めたばかりだ」

指が入り口に触れ——浅く、一節だけ押し入った。セレンの中が、きゅうっと指を締めつける。

「っあ……！♡♡ だめ……っ、中は……っ♡」

「力を抜け。傷つけるつもりはない」

耳元で低く囁かれた。吐息が首筋にかかり、鳥肌が背筋まで這い上がる。

（信じられるか——こんな状況で——力を抜けなんて……っ♡♡）

なのに身体は従ってしまう。指が浅い場所で出入りを繰り返すたびに、カントの壁が勝手にほぐれていく。ゆっくり、丁寧に、セレンの中を確かめるような動き。

くちゅ……くちゅ……くちゅ……♡

「あ……っ♡ ぐ……っ♡ ひ……っ♡♡」



指がクリトリスに戻る。濡れた指先で突起を挟むように転がされ、セレンの腰がびくりと跳ねた。

「そこ……っ♡♡ そこだめっ♡♡ あ……っやだ、へんになっ——♡♡」

太腿が震え始める。腹の奥から何か得体の知れないものがせり上がってくる。前世でも今世でも、こんな感覚は一度もなかった。

（やだ……っ♡♡ なにこれ……っ♡♡ こわい……止まらない……身体が勝手に……っ♡♡）

「あっ♡あっ♡あっ♡ っ——っ♡♡♡」

全身がびくんと痙攣する。声を殺したまま、セレンは達した。

頭が真っ白になる一瞬、水滴の音すら消えた。

「は……っ♡ は……っ♡ はぁ……♡♡」

指が抜かれた。セレンは壁にもたれかかり、荒い息をつく。太腿の内側が愛液でぬるぬると光っていて、牢の冷気がそこを撫でるたびにびくりと震える。

（いった……♡♡ 王子の指で……イカされた……♡♡）

汗ばんだ肌を冷たい空気が舐める。身体の芯だけがどうしようもなく熱い。指が触れた場所が脈打つようにずきずきと疼く。足先は凍えているのに、下腹部だけが焼けるように火照っている。

アルシエスが外套をもう一度セレンの身体に掛け直した。  
「明日から俺の傍にいろ。お前は、俺のものだ」

ぼた。ぼた。ぼた。

水滴の音が、ようやく耳に戻ってきた。

\* \* \*

護衛騎士として王子の私室に詰めるようになって、三日目の夜だった。

日中のアルシエスは完璧な氷の王子だった。セレンを護衛として冷淡に扱い、牢の夜が嘘のように私的な接触は一切ない。

「……また見てる」

だが夜になると変わる。私室に二人きりになると、アルシエスの金の瞳がセレンの身体を追う。胸の辺り、腰、太腿。視線だけで皮膚を撫でてくるような圧。

(やめろ……見るな……っ)

セレンは気づいている。指摘できないだけだ。命を救われた負い目がある。

三日目の深夜。アルシエスが書類仕事の手を止め、不意に呟いた。

「——セレンルート、何周目だと思う？」

セレンの呼吸が止まった。

「……何、周目……？」